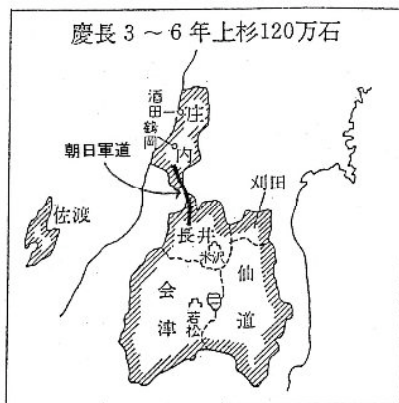


1 なぜ朝日軍道が必要だったのか

天正年間、庄内地方が上杉家の領地になりました。その後、上杉家は慶長3年(1598)に豊臣秀吉によって、所替えを命ぜられ、越後の国から会津へ移されます。越後・北信濃を削られまして、庄内と佐渡と長井・会津・仙道の方が領地になりました。120万石ということで、石高はぐんと増えて五大老の一人になるんですが、今まで、越後と繋がっていた庄内が切り離されます。それで庄内と置賜の経営にあっていた直江兼続にとって、両地方を結ぶ連絡路がぜひ必要だということになるわけです。それが朝日軍道ということになります。(地図参照)

兼続は庄内を治めるために、出羽三山の力を利用しようとして、湯殿山に沢山いろんな物を納めたり、寄進したりしています。さらに、佐野清順という腹心の坊さんを羽黒山に派遣しますが、文禄4年(1595)には寂光寺法頭清順という羽黒の別当に就任し、羽黒全部を押さえたこととなります。その後、清順は、関ヶ原合戦の後出羽三山から追われ、朝日軍道を通して米沢へ逃げます。米沢では笹野観音の別当になり、後には定勝の侍者として儒教の先生になっています。



2 置賜の史料に見られる朝日軍道

慶長4年(1599)上杉家の家臣である春日右衛門が、朝日軍道の番人頭だと思われる源右衛門にあてた黒印状によると、朝日軍道のことを「庄内すく路」と書いてあります。「直路」と書いて「すぐろ」と言ったのでしょうか。また、その

小屋番をさせるにあたり、檜材で曲げ物をつくったり、材木を切り出したり、狩猟するのに係る税金を免除するということが、田地を持たず、百姓でない者がいたなら、だれでも山の小屋に連れて行って番をさせるということを命じております。

朝日軍道の入り口である長井市草岡の青木家所蔵文書によると、同じ慶長4年に、春日右衛門が、軍道の案内役をしてくれた草岡村の修験者や村人5人に対して、苦勞をかけたので役義(租税や課役)を免除した記録があり、その後約200年経った寛政8年(1796)になっても、子孫に対して先祖が貰った褒美をそのまま認めている安堵状の記録もあります。

3 朝日町の史料に見られる朝日軍道

大沼大行院に残る某感状は、慶長5年(1600)8月1日の日付ですが、長谷堂城が攻められる9月15日の直前です。「景勝の軍勢が朝日山の麓に来て閑道を切り開いて乱入してきている。」ということは大沼別当大行坊が「おそれながら…」と最上義光に告げたことに対して、よく知らせてくれたと褒めているんですね。さらに、そういうことに励んでくれ、また鎮護国家のお祈りもちゃんとやってくれという褒美の手紙なのです。もちろんこれだけでなく、なんか少くっついてははずですね。

万覚書というのは佐竹家文書ですが、聞き書きなのです。だから文書そのものでないものですから、どこまで信用していいのかわからない、本当か嘘か厳密に判断するとちょっと気になるのですが、まず書かれていることは間違いのないことです。朝日軍道の番小屋にいた上杉家の家来たちをなんとこの立木の人たちがやっつけたという話。それに対して、今度は仇打ちに白倉が襲われる。それを追って行って、敵の大將やその他の首をいっぱい持ってですね、最上義光の前にずらり並べてみせて褒美をもらって帰って来たということです。みなさんよく知ってなさる記録だろうと思います。

朝日町エコミュージアム20周年記念事業(09'11.08) パネルディスカッション「直江兼続が開いた朝日軍道」より



北畠 教爾(きたばたけ きょうじ)氏

昭和9年生まれ 河北町溝延在住 阿弥陀寺住職

東北大学文学部卒業。昭和31年から平成6年まで、天童高校・寒河江高校・山形東高校で教鞭を執り、山形県文化財保護指導委員や西村山地域史研究会の顧問などを歴任。河北町史、寒河江市史等の編さんにもあたられ、昭和63年発行の『朝日町の歴史』の編集委員、さらに朝日町史編さん委員会の副委員長を務められている。